教師も主体的・対話的で深い学びに

～一人一人の子供を主語にする学校教育の目指す姿～

独立行政法人教職員支援機構
理事長　荒瀬（あらせ）　克己（かつみ）

「令和の日本型学校教育」を担う新たな教師の学びの姿の実現に向け、教員免許更新制に関する規定が廃止された。一人一人の教職員の研修の在り方が注目される中、中央教育審議会の副会長でもあり、教職員支援機構の荒瀬理事長に青木所長がお話を伺った。

県立総合教育センター
所長　青木（あおき）　孝夫（たかお）

青木所長

本日は、「埼玉教育」の取材をお引き受けくださりありがとうございます。先生にお会いできて光栄です。私は、先生が京都市立堀川高等学校で校長先生でした頃に御執筆された書籍の初版を持っているくらいファンでして、大変うれしく思います。本日は、先生から「令和の日本型学校教育」の実現に向けた今後の教師の姿について、様々な御示唆をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

荒瀬理事長

ありがとうございます。埼玉県といいますと、関根元教育長が今でもずっとメールで連絡をくださっています。素敵な文章を書いておられて、読むのが楽しみです。関根先生は、昔担任をされた時の生徒さんと今もお付き合いがあるそうです。生徒はいくつになっても可愛いくて心配です。私にも、付き合いのある生徒がいますが、困ったことがあると相談してきた時に、別の卒業生を紹介したこともあります。

青木所長

我々教員は、生徒が卒業してからも、信頼関係が築けていることはありがたいことですし、大切なことです。それによって卒業生からの指導の評価や進路情報も収集できます。このように卒業生からも学べることは、教職の醍醐味だと思います。

荒瀬理事長

そうですね。教職員にとって学びは大切です。研修は、その道の専門家からお話を聞くということも大事です。しかし実は、学びの材料と言いますか、師と言うべき存在は、学校の中にもいっぱいいると思うのです。教師は、子供たちから学ぶこともたくさんありますからね。

青木所長

教員が子供たちから学ぶことについてエピソードをお聞かせください。

荒瀬理事長

堀川高校を変えていく際にも生徒からたくさん学びました。「クライマーズハイ」（編集注：登山家が興奮状態となり恐怖心が麻痺してしまうこと）という言葉のように「クリエイターズハイ」というのもあるような気がします。学校づくりに懸命になると、作り手の世界に入ってしまって、作ったものを使う生徒の立場になって考えるという想像力が及ばないことがありました。小さな話ですが、例えば服装規定。生徒が、「なぜコートの色が黒または紺なのですか。グレーはダメですか」と言ってきました。これには参りました。私たちは華美でないことを示したかったのですが、先走って色を決めてしまった。それを生徒が指摘してくれたのです。

青木所長

そのエピソードを伺うと、先生方の力だけでなく生徒たちの力も結集して堀川高校が作られていったのですね。堀川高校では、生徒たちのために教員も授業で勝負したことで、教職員の学校づくりの意欲が高まったと伺っています。

荒瀬理事長

いちばんの学びは生徒からです。生徒指導と言いますが、教師指導ですね。

青木所長

私は農業高校が教職のスタートで、教科指導だけでなく、生徒指導に力を入れていた時がありました。

荒瀬理事長

私も初任が伏見工業高校というところでした。「スクールウォーズ」の映画やテレビ番組と同じではありませんが、なかなか大変なところがありました。少なくとも自分が高校教師になるという時の教師像とは全く違っていて、教室に行っても生徒がいるわけではないというところからのスタートでした。しかし、「石の上にも三年」という言葉は見事だと思うのですが、三年たったら、腹が据わったと言いますか、生徒がかわいく見えてくるのです。私は、国語の教員でした。文語文法の授業をするのですが、何のために文法がある

のかとか、教えている私自身もさほど面白いとも思っていない授業ですから、生徒はなおさらでしょう。ただ、文法は明確に答えが出ます。これはラ行変格活用だとか峻別ができます。ある時、リーゼントの髪形をした生徒が「そうか、分かった。」と言って笑顔になったのです。これには驚きました。

青木所長

笑顔ですか。その生徒は、勉強した内容が分かって嬉しかったのでしょう。

荒瀬理事長

分かると笑顔になるという姿を見て、感動しました。次に分かった生徒は、何をしだすかというと、分かっていない生徒に教え出すわけです。教えたり教わったりして分かる子が増えていくと教室中が笑顔になるのです。ふと１０年くらい前にこのことを思い出して考えてみましたが、これは学ぶという教育のリズムではないかと思います。分かるというリズムが打たれる中で、人は学んでいくのだろうということです。そのあと転勤となった堀川高校では、リズムも大事ですが、分かるということが脈打つように一人一人が自分の「知りたい」を出発点として学ぶことも大事だと考えました。こじつけかも知れませんがこれがメロディだと思います。リズムがある中でメロディが生まれる。分かるから楽しい、分からないけれども、どうしてだろうということがあってから、こんなことを学びたい、あんなことを学びたいがあるのかなと思います。

青木所長

子供たちの学びについてお話いただけましたので、中央教育審議会答申「令和の日本型教育の構築を目指して」にもありますように、一人一人の子供を主語にする学校教育の目指す姿についてお聞きしたいと思います。

【一人一人の子供を主語にするとは】

荒瀬理事長

一人一人の子供を主語にする学校教育という言葉は、答申の「はじめに」のところに、最終的に付け加えた言葉です。本文を先に構成して、それから「はじめに」や「今後更に検討を要する事項」は最後に付け加えます。答申は、じっくり中を読んでいただくのがよいのですが、「はじめに」と「おわりに」とか「今後更に検討を要する事項」とかを読んでいただけたら、基本的なことはそこに書いてあることも多いように思います。「令和の日本型学校教育」の答申では、「一人一人の子供を主語にする」ということを描いたということです。

現場の先生方からは、「これまで『個に応じた指導』ということが掲げられてきたのに、どうして『個別最適な学び』という言葉になったのか。そして、『個別最適な学び』と『協働的な学び』という言葉も出てくるし、学習指導要領では、『主体的・対話的で深い学び』と言っている」と。学びという言葉に対しての修飾語が増えているのではないかという指摘もあります。これについては、本文に明確に書いてありますが、これまでの学校教育を否定するものでは全くないのです。いいものは進めてほしいし、これまでも改善が図られ続けてきました。私の思いとしては、この答申は、着実に実施するべき学習指導要領について、取扱説明書を用意したといえるようなものだということです。

ところで、「主体的・対話的で深い学び」についてですが、『解説』の総則編を読むと、何となく分かった気になります。「主体的な学び」については記述の冒頭に、「学ぶことに興味や関心を持ち…」とあります。読み過ごしてしまいそうになりますが、他の部分も含めて、ここに書かれている単語や文節にこだわって、一つひとつで立ち止まることが必要だと思います。たとえば、「学ぶことに興味や関心を持てない子はいないか」「なぜ持てないのか」「その子は何なら持てるのか」「その子のためにはどうしたらよいか」。そうした問いかけが重要だと思うのです。

青木所長

学ぶことに興味や関心のない学びとは何かということですね。

荒瀬理事長

そうです。なぜ子供にこれができないのか、どうしたらできるのかといったことを真剣に考えていく必要があります。答申は、子供に伴走していくうえで何が重要なのかという教師に対しての問いかけによって、学習指導要領の着実な実施を進めようとするものです。「個に応じた指導」という言葉を使ってきたのに、答申で「個別最適な学び」と言い換えたのは、本当に個に応じた指導になっているかということを、学習者の視点、児童生徒の視点で見るとどうなるかと問うているのです。本当にその子、その子に応じた学びになっているのか見直す必要があるということです。これまで大事にしてきた指導と評価の一体化を一層進めましょうということです。その際、正解主義や同調圧力に陥ってはならないということも指摘しています。

【学ぶのは誰かということですね】

青木所長

当センターでも研修で先生方にきちんとお伝えしないといけませんね。

荒瀬理事長

この答申を説明する際に重要だなと思っていますのは、主語が２つあることです。子供たち一人一人が学んでいく、しかも喜びを持って学んでいく。となりますと、そのために先生一人一人が学び、考え、他の人とやりとりしていかないといけないということです。子供を主語にする学校を作るためには、先生を主語にしないといけない。先生が責任と誇りを持って取り組んでいかないといけないと思っています。

ある種、子供の学びと教師の学びは相似形であると思っています。「主体的･対話的で深い学び」が子供にとって必要であるように、先生にとっても「主体的・対話的で深い学び」が必要です。先ほどの『解説』を読んでいきますと、先生について書いてあるのかと思うほどです。キャリア形成の方向性とかも、どんな教師になりたいか、どういう教室を作っていきたいか、といったように読み替えることができます。

学ぶということには､「個別最適な学び」という意味も、「協働的な学び」も含まれています。それで、「学び、学び合う」と言っていますが、子供たちが学び、学び合う関係性を作るためには、先生自身が喜びを持って学び、学び合う必要があります。その意味からも、校内研修は非常に重要だと思います。

青木所長

教員免許更新制の廃止によって、ますます研修の重要性が叫ばれています。

荒瀬理事長

先生方も、私の体験のように子供から学ぶことがたくさんあると思います。子供が目の前で変容することを、教師は喜びに感じますよね。

青木所長

子供の変容を目にすることが教師にとってのやりがいであり、とてもうれしいことです。

荒瀬理事長

子供が変化していくことが、先生の学びの喜びになって、充実になって、それが別の子にも、全体にもと広がっていく、繋がっていくことがよい循環だと思います。そのために学校の中で、分掌で、学年で、試行錯誤や成功体験の積み重ねで研修が実は行われているのではないでしょうか。研修という言葉を使うか使わないかを別として、実はそれが研修だと思います。

研修を受けるという言葉と、研修をする・行うという言葉があります。行うということは、自分が研修の講師になるということではなくて、まさに学ぶということで使われています。義務的に受けないといけないと捉えるのは正しくないと思います。先生方それぞれが、子供たちの学びを充実させるという職務に照らして、主体的に研修をしていただきたいです。

青木所長

教師の学びも、子供の学びと本質的にとても似ています。具体的に校内研修の中身について、何かアイデアをお聞かせいただけますか。

荒瀬理事長

成人になる年齢が18歳に下げられたということもあり、これからの社会で子供たちはどう生きていくのか、本当の意味でのキャリア教育が重要になってくるのではないでしょうか。キャリアというと職業的な経歴に意味が矮小化されてしまうところがありますが。

青木所長

確かにそうですね。キャリアと聞くと、働くことや職業ととらえられがちです。

荒瀬理事長

文部科学省は「在り方・生き方」という文言を使っていましたが、その集積が本来のキャリアだと思います。義務教育の段階でも高等学校等でも、キャリア教育はどうあるべきなのかしっかり議論する必要があると思います。

一つチャンスとして挙げられるのは、中学校や高校で行われている進路検討会だと思います。進学ということを考えた時に、テストの結果がどうだとか、偏差値がどうだとか、合格の可能性がどうだとかそういう話ばかりになってしまいます。しかし、なぜこの子はこの進路を考えたのか、例えば何で獣医になりたいと言っているのか。という本質的なところを考えたいと思います。担任と進路担当が話し合うだけではなく、教科担当とかも含めて幅広い視点で話し合うと、普段担任や教科担当だけでは見えないその子の姿が見えることがあります。生徒自身が気づかないよさや可能性に教師が気づくことが、学習指導要領に記述されている、一人一人の子供が自分のよさや可能性を認識することにつながるはずです。

非常に重要なのは、自己肯定感です。自己肯定感は教え込むわけにはいきませんので、子供自身が、自分は大切な一人だということに気付くことが必要です。自分は学ぶことを通して、成長することができると理解できると、自分がそうなら、他の人もそうかも知れないという想像力が働いて、あらゆる他者を価値のある存在として認めることができます。そうすると、他者と協働して困難を乗り越えることができるようになります。そうした豊かな経験や心を持つ人が増えていくと持続可能な社会ができるという筋書きが、学習指導要領前文にあります。それが、教育課程だと言うのです。自分自身のよさや可能性を認識できるようになるということが重要ですね。しかし実際には難しい。そこで、教師が気づかせることが求められます。

校内研修でするべきことは何かということが、まず考えるべき課題でしょうか。同時に、今までやっていることを学びに変えていくことも大事なことです。子供にとっても、先生方が学び、学び合う姿を見ることがとても大事だと思います。

青木所長

学校は子供たちが学ぶ場であることは当然ですが、先ほどから教師自身も学ぶ場であるというお話を伺いました。研修については、初任者研修を始め、５年、中堅とやっておりますけれども、ベテランの先生方には学びつつ研修をリードする役割が増えそうです。

荒瀬理事長

知識を身に付けるための研修は大事です。それだけでは終わらず、研修で身に付けたことをどう使っていくか、学校の課題にどう取り組むのかということに実質化していける流れになるといいですね。

青木所長

「埼玉教育」は、管理職の読者も多数おります。堀川高校時代のエピソードについてもう少しお聞きしたいのですが。

荒瀬理事長

少なくとも当時は公立高校普通科に対する厳しい二種類の指摘がありました。一方では、大学に受からない、一方では、大学に受かるだけが高校じゃない、という二つです。この二つに応えるためには、と考えたのは、自分で勉強する生徒に育てるということです。

まず、好きなこと、やりたいことから始める。好きなことをもっと掘り下げようとすると、様々なことを勉強する必要性に気付く。やってみると面白い。それでさらに学ぶ。そういう循環を生んだらいいのではないかと思いました。自分のしたいことを学ぶことが人間にとって一番いいのではないか、ということです。そんな中で「探究」という言葉に出会いました。なかなか興味深い言葉だと考えたのです。

「探究」のモデルは、小学校で始まりかけていた総合的な学習の時間です。しかし、誰もやったことがありません。ずいぶん試行錯誤を重ねました。生徒たちに「すべては君の『知りたい』からはじまる」というメッセージを送ることにしました。「知りたい、見たい、聞きたい、やってみたい、こんなふうになりたい」という、生徒それぞれの様々な「〜たい」を重ね合わせて楽しい学校を作っていきたいと思ったのです。

学校案内のパンフレットを作って、そこに返信用はがきを付けて、「君は高校でどんなことがしたいですか」という質問を載せ、京都府内全中学３年生に配布しました。新聞社が取材に来てくれましたので、喜んで中学生のやってみたいことを尋ねていますと話したら、「学校で何をやりたいかと中学生に聞いている、こんな頼りの無い学校でいいのか。」というような記事が出てしまいました。ショックでした。しかし、しばらくしてショックは吹き飛びました。山のようにはがきが返ってきたのです、中学生たちから。「宇宙の始まりについて勉強したい。」とか「小学校のときにやった地域の自由研究が楽しかったから、同じようなことがやりたい。」「宮沢賢治の童話について話し合いたい。」「素数について知りたい。」とか様々です。新聞には叩かれてしまいましたが、中学生は求めていたのです。その後開いた説明会には2000人もの参加がありました。

青木所長

それから約20年たって新学習指導要領が追い付いてきたようですね。

荒瀬理事長

そんなにおっしゃっていただくと、こそばゆい気持ちです。本当に試行錯誤しながら、私たち自身が探究を進めてきました。ただ、生徒が主語になる学びは、各地で多くの先生が取り組んでいらっしゃいました。堀川高校でも例えば国語の先生が、源氏物語の授業で生徒たちにグループで学習した内容を発表させるといったことをしていました。どこの学校でも見られる光景です。この先生が面白いのは、説明をさせてから、「何か質問は？」と聞くんですが、質問がないと、「えっ？」と表情豊かにびっくりして見せるのです。すると生徒はドキッとします。発表の中に変な内容があったのだろうと思うわけです。もちろん、発表した生徒たちも、一生懸命やったのに何か違うのかなと思うわけです。そうすると、その先生は「君たちに質問がないなら、ま、それでいいか。」と言って平気でそのまま次のグループを指名する。答えを言わない。しかし、それでそれを試験に出すのです。試験も含めて、大事な学習なんですね。こういうことが当たり前になると、生徒も試験の点数を気にするより、解説を受けて更に深く学び、源氏物語の世界を楽しむようになっていく。

「探究」に取り組む際にも、こういった教授法を備えている先生は、生徒に上質の学びを用意できます。熟練した指導者は、新しい学び方にも対応できます。

別の話になりますが、私は若い人とか失敗のあった人とかを人事でどうするか考えました。若い人は危なっかしいので、経験を積んだ人たちが支えようとしてくれます。ベテランだと当たり前のことも、若い人がやれたら、みんな心配した分、安堵が大きくてほめる言葉も自然に出ます。優しい組織になります。また、失敗した人は、自信を無くしている場合があるのですが、挽回のチャンスを提供しますと、喜んでくれて、望外の働きをしてくれることがあります。

気を入れて、心を込めて、力は抜いて。抜くことのできるほど力を持つのはなかなか難しいですが、そういう気概が、リーダーには必要なのだと思います。

私は、本当に幸せで、今までいろいろな方に助けていただきました。教職員支援機構の仕事を引き受ける際、最後の仕事を与えてもらったという気持ちになりました。今まで様々に頂いた恩を直接その方に返すことができないので、井上ひさしが「恩送り」と書きましたが、その言葉のように、頂戴した恩を次の世代の人たちに送りたいと思っています。

青木所長

最後に埼玉県の先生方へメッセージをお願いします。

荒瀬理事長

埼玉県の先生方は、子供たちの学びを大切にする教育に先進的に取り組まれてこられたと感じています。今後一層、子供が主語になる学校づくりが充実しますよう、御期待申し上げます。

【「研究修養」の額の下で】